

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)

個人研究

2019年度研究成果報告書

研究代表者	所属部局・職	氏名
	現代心理学部・教授	大石 幸二 印
研究課題	社会炎症を示す自閉スペクトラム症児の社会的健康を促す早期社会接続プログラムの実行	
研究期間	2019年度	
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 926,440円	／ (採択金額) 938,000円

研究の概要(200~300字で記入、図・グラフは使用しないこと)

本研究の目的は、自閉スペクトラム症(ASD)児への早期社会接続プログラムを、保育・教育の現場で実施することであった。研究1~3の3段階の実践型研究を行い、この目的を達成し展望を拓いた。研究1より、社会的健康に関する研修を行うことで保育士・教師等の目を「アセスメント」や「社会的相互作用」に注目させることができた。また研究2より、保育士・教師等への対人回避に関する研修を行うことで保育士・教師等の直接的支援を柔軟にさせることに繋がった。さらに研究3より、行動コンサルテーションを複数回実施することで保育士・教師等の実践変革の意識・態度を高めることに成功した。以上の成果を、合計18件の研究発表として公表した。

(以上, 299字)

キーワード(研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[自閉スペクトラム症] [感覚過敏] [早期社会接続]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)**研究 1 (保育士・教師への社会的健康に関する研修) * 研究発表④- 8 にて研究成果の一部を公表済**

目的：保育士・教師等に対して「社会的健康」概念の重要性を示唆し知識獲得を促す研修を実施し、効果の確認を行うことを目的とした。

参加者：自由意思により研究協力を申し出た青森県八戸市内の保育士・教師等（保健師を含む）合計 19 名が参加した。

研究期間：2019 年 6～8 月に実施した。参加者は、前記の期間に 2 回の研修（講義と事例検討）を受講した。

研究方法：本研究は、知識面に対する教育・訓練（研修）が直接的な支援効果を有するか否かを検証するものであった。まず、保育士・教師等（保健師を含む）が行った研修報告（自由記述）をテキストマイニングにより分析し、獲得された知識を明らかにした。その上で、SP（感覚過敏を含む感覚処理の特異性）と Kid-KINDL（子どもの幸福感尺度）の評定値の変化を評価した。

研究成果：テキストマイニングによる分析の結果、保育士・教師等（保健師を含む）の研修報告（自由記述）に見られた高頻出かつ特徴的な語句（ただし、括弧内はスコア値）は、名詞句については「アセスメント (17.85)」「社会的相互作用 (7.65)」「幼児の描出活動 (7.65)」「保育者の役割 (4.54)」「発達支援 (1.20)」であった。その係受けをみると、「アセスメント」については「子どもの支援を行う際にアセスメントが重要であること」が認識されたことが分かった。また「社会的相互作用」については「子どもの社会的相互作用を促進するために日々の関わりを見直す必要があること」が認識されたことが分かった。ただし「幼児の描出活動」「保育者の役割」「発達支援」については多様な文脈で使用されており、クラスターを特定することができなかった。

子どもの SP および Kid-KINDL の評定値の変化については、個人差が大きい (SP：-4～+2, Kid-KINDL：「精神的健康」「交友関係」および「学校満足」で 2～7 ポイント上昇) という結果になった。総合評価において否定的な結果を得た事例は見られなかったが、日常的な保育・教育の効果との判別が困難であるという課題を残した。

研究 2 (保育士・教師への対人回避に関する研修) * 研究発表④-14 にて研究成果の一部を公表済

目的：精神性疾患や精神症状の発現につながる「対人回避（感覚過敏を背景とする）」の影響とそれへの対応について周知するための研修を実施し、効果の確認を行うことを目的とした。

参加者：研究 1 と同じ参加者 19 名に加え、自由意思により研究協力を申し出た山口県山口市の教師等 25 名を合わせた合計 44 名が参加した。

研究期間：2019 年 8～11 月に実施した。参加者は、前記の期間に 2 回の研修（ワークショップとシンポジウム）に参加した。

研究方法：本研究は、技能面に対する教育・訓練（研修）が直接的な支援効果を有するか否かを検証するものであった。教育・訓練（研修）効果を見る際には「得られた理解・知識を生活や実践に役立てることができるかどうか」が重要であるとされる（米原，2014）。そのため、研究 1 で課題となった「日常的な保育・教育の効果との判別が困難」であることに鑑みて、子どもの支援について 4 段階の自己評定を求める調査方法を、新たに適用した。調査項目は 12 項目であり、「環境調整の実施度」「指示・教示の適切性」「行動形成手続きの実施度」「随伴性管理の適切性」の 4 領域となっていた（岡田，2017）。

研究成果：「アセスメント」と「社会的相互作用」に関する専門研修を修了した特別支援教育コーディネーターを担った経験のある 14 名（研修群）とその経験のない 30 名（統制群）を比較した。その結果、研修群の評定値平均は 3.86（範囲：3.78～4.00）であり、統制群の評定値平均は 3.81（範囲：3.70～3.91）であった。両群を比較すると、研修群が分布の右側に 0.8 ポイント以上ズレており、「随伴性管理の適切性」（群間差なし）を除く 3 領域において有意に高い評定値を示していた。よって、研修群において教育・訓練（研修）の効果を認めた。

また、統制群に含まれる保育士にウェイトिंगリスト法により介入を行った。その際、低登録・感覚探求型の特性を有する自閉スペクトラム症 (ASD) 児への逆模倣介入（早期社会接続において典型的に用いられる手法の 1 つ：浦崎，2012）を行うことができるよう行動コンサルテーションを実施した。その結果、3 か月間で感覚・自己刺激の機能を有する行動がゼロレベルまで減弱した。このことから、研究 1 に示した基本的な知識に加えて、技能面を促進する教育・訓練（研修）を行うことにより、ASD を含む神経発達症群の乳幼児・児童に対する具体的な支援が対人回避（感覚過敏を背景とする）の反応を弱める可能性があるということが示唆された。ただし、このウェイトングリスト法による研究は事例研究である。知見の一般化のためには、引き続き、より多くの事例でこのことがリプリケート（再認）される必要がある。このことも踏まえ、研究 3 を行った。

研究成果の概要 (つづき)

研究 3 (保育士・教師への行動コンサルテーション) * 研究発表①- 1 にて研究成果の一部を公表予定

目的: 研究 1 と 2 の研修を受けた保育士・教師, および療育担当者が在籍する保育所・幼稚園・学校および療育機関に対して介入 (行動コンサルテーション) を行い, 効果の確認を行うことを目的とした。

参加者: 研究 1 と 2 の参加者の中から保育士・教師等合計 8 名が自由意思に基づいて参加した。

研究期間: 2019 年 11 月～2020 年 1 月に実施した。参加者は 3 回の行動コンサルテーションを経験した。

研究方法: 3 か月の研究期間に 3 回の行動コンサルテーションを行った。研究 1 と研究 2 より, ①知識面の教育・訓練 (研修) には一定の意義があり, 保育士・教師等の目を「アセスメント」や「社会的相互作用」に注目させる効果があることが示唆された。また, ②技能面の教育・訓練 (研修) にも一定の効果があり, 「環境調整」「指示・教示」および「行動形成」に関する直接的支援を変容させられる可能性があると考えられた。さらに, ③行動コンサルテーションを行うことで, ASD を含む神経発達症群を有する乳幼児・児童に対する具体的な支援が対人回避 (感覚過敏を背景とする) の反応を弱める可能性があるということも示唆された。これらをふまえ, 乳幼児を担当する 8 名の保育士・教師等に対する介入の効果を調べるために, 行動観察と面接調査を行った。

研究成果: 【事例 1】行動コンサルテーションにより「感覚過敏を有する ASD 児支援のサポートのポイントが焦点化され, 日常の保育・教育において実践することができた」との語りを得た。日々の保育・教育における実践の内容については「日々の保育の連続性を考慮し, 複数担任間で対応の一貫性を図る試み」を指摘していた。

【事例 2】行動コンサルテーションにより「保育者だけでは気づかない新しい視点を得ることができた」との語りを得た。新しい視点の内容については「保護者に対する語り方・伝え方の技術」を指摘していた。

【事例 3】行動コンサルテーションにより「感覚過敏を有する ASD 児の特性を捉え, 段階的に支援計画を立案しながら計画の遂行と省察を繰り返す手法を学んだ」との語りを得た。省察の内容については「一人ひとりの特性をその時々において具体的に捉え言語化すること」および「模倣・リズム・接近と接触など乳幼児の対人相互作用において重要な事項を検討すること」を指摘していた。

【事例 4】行動コンサルテーションにより「これまで対応に苦慮していた事例に対する手短かで効果的な助言を得ることができた」との語りを得た。手短かで効果的な助言の内容については「身体介助 (フィジカルガイダンス) の手法」「動作語一語文を用いた言語指示の手法」および「固執性を単に行動問題と捉えることなくそれを環境文脈内で機能させる基軸行動発達支援法」を指摘していた。

【事例 5】行動コンサルテーションにより「保育士・教師等の児童観や教育観に寄り添った助言により, モチベーションが高まった」との語りを得た。寄り添った助言の内容については「保育所保育指針・幼稚園教育要領に即した説明」および「保育士・教師等の意図や考えの肯定的評価」を指摘していた。

【事例 6】行動コンサルテーションにより「子どもの心理面の特徴や行動面の理由について深く理解することができた」との語りを得た。行動面の理由に関する深い理解の内容については「こうすれば, きっとこんなふうには子どもは行動するだろうという予測」「その予測を念頭に置いた子どもの行動観察」および「実際にその予測が的確であったかどうかの検証」を指摘していた。

【事例 7】行動コンサルテーションにより「乳幼児一人ひとりの発達特性に合った関与方法や指導・支援の仕方について学ぶことができた」との語りを得た。指導・支援の仕方の内容については「保育・教育に携わる者が子どもを主語にした語り方 (理解の助け方)」および「見通しをもった日々の保育活動の展開」を指摘していた。

【事例 8】行動コンサルテーションにより「保育士・教師等の意図や願い, 適用している技術を汲んだ指導・助言に助けられた」との語りを得た。汲んだ指導・助言の内容については「保育士・教師等の取り組みを否定しないこと」「肯定的な面に着目してそれを言語化することによる自己効力感の高まり」および「保育士・教師等が実践を深めたいと感じられるような動機づけ」を指摘していた。

以上の結果の妥当性を評価する目的で, 3 名の専門家に依頼してリアルタイムで行動コンサルテーションの評価を得た。その結果, 3 名の専門家はともに実施された行動コンサルテーションが「効果的」であったと評価した。その理由として, ①指導・助言の範囲が《身体》《情動》《認知》《環境》という多側面にわたっていたこと, ②行動観察事実に基づき, 保育士・教師等が日常の実践において遂行可能な具体的提案を行っていたこと, ③単なる知識の付与ではなく, 保育士・教師等が日々の実践を振り返る (省察する) ためのポイントを手短かなキーワードで示していたことを挙げていた。そして, 実施された行動コンサルテーションがチーム支援の基盤となると評価した。

※ この (様式 2) に記入の、成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書 (A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式) を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

①雑誌論文

- 1) 秋元響・大石幸二・若井広太郎・藤島瑠利子 (2020) : 自閉スペクトラム症児の心理化の促進—逆模倣による介入の効果—。人間関係学研究, 25, 修正採択決定済。【査読あり】
- 2) 大石幸二 (2019) : 自閉スペクトラム症児における社会的健康をめぐる展望—わが国の文献調査にもとづく臨床的研究の知見と課題—。人間関係学研究, 24, 25-32。【査読あり】

②図書

- 3) 大石幸二監修 (2020) : 先生のための保護者相談ハンドブック—配慮を要する子どもの保護者とつながる3つの技術— (全119頁)。学苑社。

③シンポジウム・公開講演会等の開催

- 4) 熊仁美・大石幸二・山本崇博 (2020) : エビデンスに基づいた発達障害支援と地域連携—幼少期から学齢期の実践に学ぶ—。江戸川区発達相談・支援センターキックオフシンポジウム (2020/02/15), 江戸川区総合文化センター。
- 5) 神尾陽子・加藤永歳・高橋脩・中島洋子・藤岡宏・足立潤・山本彩・大石幸二・田中裕一 (2019) : 地域の発達障害支援における多職種連携—最初の診断を行うことの意味を多職種連携支援の観点から問う—。日本発達障害学会第54回研究大会・学会企画シンポジウム (2019/08/24), 北星学園大学。
- 6) 神尾陽子・外岡資朗・興水基・田邊貴仁・大石幸二・瀬上清貴 (2019) : 発達障害の疑いのある特別な配慮を要する幼児に関する研修—パステルゾーンのお子さまとその家族への対応を学ぶ—。一般社団法人・発達障害専門センター (2019/08/21~2020/02/12), かごしま県民交流センター。

④その他

- 7) 大石幸二制作・監修 (2020) : 保護者相談—3つの技術—。DVD (19分50秒), 新宿スタジオ。
- 8) 大石幸二 (2019) : 自閉スペクトラム症 (ASD) 児のストレスを低減するために—唾液コルチゾール濃度の測定による評価の試み (予備的研究)—。日本特殊教育学会第57回大会 (広島大学), ポスター・P11-38。
- 9) 秋元響・大石幸二 (2019) : 逆模倣が直観的心理化に及ぼす影響の評価—自閉スペクトラム症児を対象として—。日本特殊教育学会第57回大会 (広島大学), ポスター・P05-23。
- 10) 工藤寛也・大石幸二・若井広太郎 (2019) : 自閉症児への相互交渉型言語指導による問題行動低減の支援。日本特殊教育学会第57回大会 (広島大学), ポスター・P05-27。
- 11) 和田恵・大石幸二 (2019) : 高機能自閉症児における命題的心理化の促進。日本特殊教育学会第57回大会 (広島大学), ポスター・P06-09。
- 12) 金谷裕香・大石幸二 (2019) : 神経発達症児をもつ母親の育児ストレス軽減を目指して—養育知識に着目したペアレント・トレーニング—。日本特殊教育学会第57回大会 (広島大学), ポスター・P06-10。
- 13) 吉野有紀・大石幸二 (2019) : 発達障害傾向のある人の周囲にいる人の関わり方の検討。日本特殊教育学会第57回大会 (広島大学), ポスター・P06-11。
- 14) 高辻穂香・大石幸二 (2019) : 発達障害児支援において児童の良い反応を引き出す要因の検討—関わり方の柔軟性をどのようにアセスメントするか—。日本特殊教育学会第57回大会 (広島大学), ポスター・P06-12。
- 15) 遊馬結・大石幸二 (2019) : ソーシャルストーリー™を用いた家庭での支援—ペアレント・トレーニングとの比較—。日本特殊教育学会第57回大会 (広島大学), ポスター・P06-17。
- 16) 山田圭祐・竹森亜美・出野由花・大石幸二 (2019) : 知的障害児の会話に関する支援方針の検討—表現力向上・自発的発話を増加する取り組み—。日本特殊教育学会第57回大会 (広島大学), ポスター・P07-28。
- 17) 出野由花・竹森亜美・山田圭祐・大石幸二 (2019) : 知的発達障害児の自己選択・自己決定を促す条件の検討。日本特殊教育学会第57回大会 (広島大学), ポスター・P07-29。
- 18) 竹森亜美・大石幸二 (2019) : 筆圧の調整をねらいとした運筆課題が書字に及ぼす効果の検討。日本特殊教育学会第57回大会 (広島大学), ポスター・P15-36。